

だろうかと思っております。もつと良い場所が無かったのだからかと、一生を棒に振ったような気持ちです。それにしても戦争のために国民がこんな苦勞をしたのです。あの頃の勞苦を後世に言い伝えるものがあります。

## 引揚げ後の開拓に血の勞苦

北海道 秋田 竹雄

終戦の詔勅を聞き、戦争の恐ろしさと惨めさを身に沁みて体験しました。

終戦後もソ連軍の攻撃が続けられたのです。樺太豊原市郊外並川村から引揚げするため馬車で荷物を積み駅へ出しに行ったところ、中止だから荷物は受け取れないと言う。

豊原駅から三キロ離れた西大橋まで引返した時ソ連の飛行機が豊原駅を爆撃、物凄いい爆発音と共にもく／＼とした黒煙、真赤な火の手が上がったのが見えた。

駅の建物と共に駅及び駅前広場に避難していた群衆が吹き飛んだと云う、あの時もう少し駅にいたら私の命もなかったのです。

やがてソ連軍が侵攻して来て、女達は髪を切り男装をしたり、大変な騒ぎであった。幸い父が村長をしていた関係で我が家に一人の保安員らしいソ連兵が寝泊まりするようになり又学校の向い側であったので先生も一人加わりパンを買ったりして、仲よくなり、我が家は安心して生活ができた。その内に私は徴用で造材に駆りだされ家を離れましたが、我が家では馬を四頭、乳牛十五頭飼っていましたので、牛乳を売ったり、苺を豊原のバザールで売って暮しておりました。

又、馬と牛を一つ残してお金に換えたりしました、町の人達は食糧などで大変であったようです。

昭和二十二年川上炭山へ馬搬作業に出ていた時十月の上旬だと思いますが向いの門前さんのお母さんが亡くなったので帰宅したところ、十一月に引揚げがあるとの話で、父が体を悪くして病院の証明を貰い先に引揚げていたので、ソ連の村長に頼み、家族九人分の

バスポートを貰い、十一月八日友達や学校長達に送られて汽車に乗り込みました。その時、私が名指しで呼び出され、私は何も悪いことなどしたこともないので一瞬戸惑いました。

我が家では働き手は自分一人なため発車のベルまで隠れていて窓から飛び乗りましたがあの時は若かったからそんなことができたのだと今にして思い出している。

真岡の船待ちの収容所は小高い山の上で十二月七日引揚船に乗り込むまで気が休むことはありませんでした。

乗船するまでは毎日使役に出いたので疲れと安堵感でぐっすり船の中で寝てしまいました、小雨の降る中を函館に上陸、元倉庫だったところで一夜を過し、引揚前、父と連絡場所を打合せていた函館のゴードー焼酎会社に勤めていた叔父藤井さんに父の引揚先を聞き、十二月十一日夜七時頃早来駅に着きました。

宿屋もなく駅長さんの厚意で当直室に泊めて貰い次の日は宿屋を照会して下さり、私は役場で父の居所を

調べて貰い雪と氷の山道を九キロも歩いてやっとたどり着いたが留守で已むなく、前の年に引揚げていた同村の黒畑さんに行き、われ／＼が引揚げて来たことを伝えると共に明日迎えに来るように頼んで帰りました。次の日坂東さんのおじいさんが荷馬車で迎えに来て下さり荷物と子供を乗せ父の家に着きました。

次の日から食糧との戦いです。父は一人で冬支度もできておりません、キャベツの鬼葉を貰い、漬物に、味噌汁に、梅干くらい馬鈴薯を拾いどうにか春まで凌ぎました。

母は十人の毎日の食事には大変な苦勞であったと思います。そのため昭和二十四年二月二十四日栄養失調で死亡してしまいました。

火山灰で営農はできないと思い、当別や札幌の近くを探しましたが良い所は見つかりません。

我が家の開墾は島田鋏一丁だけ、雨の日は役場の西指導員に教えてもらい、住宅や牛舎を火山灰でブロックを作り兄弟で建てました、この辺では初めてです。

その後湯の沢開拓団の人も見に来て、建てる人もおりました、住宅は四十七年に建て直した牛舎は今でも使っています。馬と牛を一頭づつ貸付けを受けて牛乳も二年後に出荷できるようになり、食べるものも大部楽になって来ました。

胆振馬鈴薯原種農場でも開墾が始まったので、黒畑さんや城畑さん兄弟達と一緒に抜根作業に五キロも離れた所まで裸足で通い、作業の時だけ地下足袋をはく状態で、少しづつ造った畑にイナキビ、ライ麦を作り主食に当てました。

四、五年後と思いますが、父が引揚げるとき川のありとところと言っていたので山奥であったが川の近くで五十アールの水田を造り直蒔きでしたが小西指導員の指導の下に、一アール当り四俵程の収穫ができました。

その後も造田を繰返し、又離農された土地を買い、息子も後を継いでくれ内孫も五人となり、妹や弟も結婚させ、父母は亡くなりましたが現在家族九人で楽しく農業をやっております、引揚後の労苦は並々ならぬものであったことを後世に語り継ぐものであります。

## 義父のお蔭で命拾い

北海道 北村 ユキ

私は八月九日ソ連軍が侵攻して来た時は、珍内の山奥四十キロくらいの小さな村に住んでおり夫は王子製紙の林務部に勤め、山の木材の買付の係で、何の不由なく暮していました。日本軍の命により、女子供、老人は直ちに避難し南下せよとのことで夫と別れ、夫の父と作八十六歳と二人で馬車を雇い、腰椎麻酔による歩行困難の父を乗せ、少量の衣類と現金を持ち南下避難を始めた。

途中幼い子供達を大勢乗せ遠足気分でしたところ、突然ソ連の飛行機が飛来し機銃掃射を始め、子供達を林の中に逃し、私は六十二キロの父を背負い林の中に逃げる途中、弾が身近なところを掠めること四、五度、父をおろして、私がおの上に覆い被さり、自分はどうなっても父だけは助けなければと、夫より預かったこ